

### 動的なあそびの基礎となる幼児の運動能力特性とその個人差について

○渡邊 真也 岡田 真平(一般財団法人身体教育医学研究所)  
 上岡 洋晴(東京農業大学地域環境科学部身体教育学研究室)  
 柳沢 登美 塩崎 和男 岩田 広子 岩下 由美(東御市健康福祉部)

【目的】幼児が動的なあそびを楽しむためには、基本的な運動能力の獲得が望ましい。そこで本研究は、T市在住の公立保育園児を対象に運動能力調査を行い、その特徴を客観的に把握することを目的とした。【方法】長野県T市の公立保育園に通う幼児559名を対象に、①立ち幅跳び(下肢筋力、瞬発力)、②体支持持続時間(上肢支持力、筋持久力)、③開眼片足立ち(平衡性)の3種目を測定した。【結果】各種目の測定結果は、学年ごとに、①立ち幅跳び(年少 $50.6 \pm 20.5$ cm、年中 $68.2 \pm 19.0$ cm、年長 $86.2 \pm 18.7$ cm)、②体支持持続時間(年少 $10.4 \pm 10.0$ 秒、年中 $23.7 \pm 17.1$ 秒、年長 $40.1 \pm 26.2$ 秒)、③開眼片足立ち(年少 $7.2 \pm 6.7$ 秒、年中 $16.2 \pm 13.2$ 秒、年長 $29.4 \pm 23.6$ 秒)で、3種目全てにおいて、年齢と運動能力は有意な正の相関関係であった。学年ごとの分布状況は、立ち幅跳びのみ正規分布であったが、他の2種目は年齢が上がると能力の高い外れ値が認められた。性差については、立ち幅跳びは学年が上がると男子が高く、体支持持続時間はどの学年でも性差なし、開眼片足立ちはどの学年でも女子が高い結果であった。【考察】実施した3種目において、年齢が上がるに連れて運動能力が向上するという一般的な傾向が見られたが、全ての種目において大きな個人差が確認された。幼児期の個人差は今後の運動体験とそれに伴う運動能力の発達に影響を及ぼす可能性が高く、低体力児への支援の重要性が示唆された。

### レクリエーション教育における授業効果

○茅野宏明(武庫川女子大学)、長岡雅美(武庫川女子大学)、松尾純子(武庫川女子大学)

武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科及び同短期大学部人間関係学科では、過去20数年にわたり、レクリエーション関連資格の取得をめざす学生の教育プログラムの一環として、通常期に講義・実技演習科目を開講するだけでなく、集中講義として宿泊型教育プログラム(宿泊教育)も実施している。昨年は宿泊教育に関する実践的展開を報告し、今後の課題として、宿泊教育による意識の変化を調査研究し、その効果を明らかにすることであった。そこで、本研究では宿泊教育の授業効果について、研修後の意識変化を検証し考察することを目的とした。

対象の宿泊教育は平成21年2月に2泊3日で実施され、48名(大学生21名、短大27名)が参加した。宿泊教育終了直後に質問紙による調査を実施し、同年6月に再度同じ質問紙による調査を実施し、両調査の違いを統計的に検証した。質問項目は、経済産業省が推奨する『社会人基礎力』に示された18項目に、宿泊教育で教員が意図するレクリエーション活動援助者に必要な資質に関する4項目をつけ加えた22項目で構成された。

統計的に有意差が見られた項目は3項目：①最善策を検討する；②話しやすい環境づくり；③ルールや規則を守る、であった。それ以外の項目では統計的に有意差は見られなかった。今後は、宿泊教育研修前後の違いについて調査研究を続けることとする。